編者はしがき

本書「教育実践篇」下巻は、三篇の座談会筆記で構成されている。それぞれ「芸術教育」「宗教教育」「生命の教育の実践」についてがテーマであるが、本書「はしがき」には次のように述べられている。

「（本書は）道徳教育のやり方をはじめとして、早教育、芸術教育、宗教教育、その他、書道、茶道、華道等の技術の習得、修練、その向上などについて、その道の専門家の口をとおして、実際の対談形式をとって説かしめたものである」

第一の「芸術教育についての座談会」は、彫刻家で現在の日展の前身である帝展審査

員を務め、生長の家のマークの制作者でもある山根八春氏、同じく彫刻家で生長の家の神像の制作者でもある服部仁郎氏、同じく彫刻家の片岡環氏など錚々たる芸術家が集まった座談会である。

生長の家立教当時から、特に東京を中心に多くの芸術家が集まり、月刊誌「生命の藝術」も発行されていた。その輪の中心にいたのが山根八春氏や服部仁郎氏であり、画家の松本竣介氏、遅れて洋画家の林武氏も加わった。第一線で活躍する芸術家達が谷口雅春先生の教えに共鳴し、その許に参集した。後年、昭和四十一年には生長の家芸術家連盟として組織的な活動にまで発展した。

この座談会では、谷口雅春先生が司会者を兼ねて、「芸術の技量や一般の勉強進度が早く進む急所はどこか」と問題提起をされる。それに対して、山根八春氏は「勉強ということについては生長の家の教を伺ってから後に、はっきりこんなことを思うようになりました。結局神と一体になることが勉強の一番早道のコツで、唯一の道であるというより外ないということであります。そのことは、生長の家に入ります前に体

験したことがみんな、あれもそうであったし、これもそうであったというようになってはっきりして来たのであります」(三〜四頁)と応え、続いて服部仁郎氏も「覘いどころと申しますと、私達がここに彫刻なら彫刻、画家なら画家になる一つの過程を経るために、いわゆる入学試験としての勉強をする時に少年達が考えなくてはならないのは、いわゆる入学することが目的か、彫刻なら彫刻をやることが目的か、その覘いどころは入学が目的でなく、やはり自分が彫刻なら彫刻をやることを目的に勉強するのだということが本当の覘いどころであると思うのです。これは外の職業にも当て嵌めて行くことが出来るかと思います」(六〜七頁)と答えている。

さらに話題は「コツ」や「型」について進む。谷口雅春先生は「コツ」について次のように述べられる。

「手を取って、ココはこうと教わらないでコツを自得するのは、とてもの天才であって、特殊の感受性をもっていて、剣道なら剣道の師匠の太刀筋を唯じっと見ているだけで以心伝心に自得する——こんな天才ばかりなら教育家も教育も要らない。教育は、

唯見ているだけで自得出来ないような凡人から天才的なものを引出す術ですよ。飯炊きから一流の剣聖になった剣道の天才にしても唯、飯を炊いているだけじゃないのであって、どこかへ行って柱を見附けたり、木の木を吊り下げて、それを木剣で打つ、木がハネ返って自分の方へ向って来る、それを受ける、又打つというふうにして観て来たところを実際に長年月修練して実際のコツを体得したのですよ。ところが単に見るだけで、そうしてそれも一週間に一遍一時間お手前拝見などといって見ているだけのことでは到底何のコツも得られないということになるのですよ。だから、最初大体のコツとか型とかを教えておいて、それを毎日修練させるようでないと何の芸道でも役に立たない」(三一〜三二頁)

「形式というものに、無我に随う。無我になれば実相が出て来る。すると結局形式を出て今度は本当の自分の個性——個我を超越した、実相の個性というものが出て来るのでしょう。そこにつまり芸術の名域というか、名境というのか、そこに達するのでしょうね」(五三頁)

次の「宗教教育についての座談会」では、女性評論家・社会活動家で著名な平塚らいてう女史、東京の香蘭女学校校長の井上仁吉氏が参加している。井上氏は「宗教的情操」を育てるためには、何事にも感謝する習慣を付けさせることが大切だと述べる。平塚氏は「個」と「全体」との融合の体験が宗教だと語る。それらの言葉を受けて、谷口雅春先生は、「『個』が本来孤立した存在でなく、全体に融け込み、全体に関係してはじめて存在しているものであるという自覚から、自然に湧いて来る有難いという感じ、これが宗教的情操です。『天地一切のものに感謝せよ、皇恩に感謝せよ、父母に感謝せよ、夫又は妻に感謝せよ』と生長の家の教にあるのがそれです」(一三〇頁)と答えられる。

第三の「生命の教育」座談会では、関西地方の小学校、中学校、高校、特別支援学校等の校長・教諭十七名による座談会である。昭和十年に「生命の教育」誌が創刊され、同時に「生長の家教育連盟」が結成された。現在の公益財団法人「新教育者連盟」の前身であるが、この座談会もそうした教育運動の一環として開催されたものと思われる。

この座談会では、卓球を通して教師と生徒との関係が深まり英語の成績が上がった話、子供の不登校を母親と本人の二人を諭して解決した話、絶対叱らない教育に徹した話、などの教育実践例が数多く報告されている。

以上、谷口雅春先生の「生命の教育」についての実際例と実践例がふんだんに紹介された三つの座談会は、今日の混迷する日本の教育の現状に大きな光明をもたらすことは疑いのないところである。

令和二年六月吉日

谷口雅春著作編纂委員会